

3. 令和2年に特に注意を要する病害虫

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断グループ

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から令和2年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 令和元年度の病害虫の発生状況

令和元年度は春季の高温少雨（多照）により、小麦の赤さび病が多発し、また、水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメやたまねぎのネギアザミウマが早発・多発した。ネギアザミウマは夏季の高温傾向により、キャベツ等の葉菜類でも被害が認められた。一方で8月を除く栽培期間のほとんどが少雨傾向だったため、多くの病害で発生量は少なくなった。りんごの黒星病は、8月が並温で多雨だったため多発した。

主要病害虫で多発となったのは、水稻のヒメトビウンカ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、秋まき小麦の赤さび病、たまねぎのネギアザミウマ、りんごの黒星病、腐らん病であった。やや多発となったものは、水稻のイネミギワバエ、春まき小麦のムギキモグリバエ、たまねぎのタネバエ・タマネギバエ、だいこんの軟腐病、りんごの斑点落葉病、ハダニ類であった（表1）。この他、秋まき小麦の縞萎縮病の発生が道東を中心に目立った。

表1 令和元年度に多発・やや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	ヒメトビウンカ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、イネミギワバエ
秋まき小麦	赤さび病
春まき小麦	ムギキモグリバエ
たまねぎ	ネギアザミウマ、タネバエ・タマネギバエ
だいこん	軟腐病
りんご	黒星病、斑点落葉病、腐らん病、ハダニ類

下線は多発生となった病害虫を示す

3. 令和2年に特に注意を要する病害虫

(1) 秋まき小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照の気象条件で多発しやすく、このような気象条件となった令和元年度は空知、上川地方をはじめ、全道で発生が目立った。道内で作付けされている秋まき小麦の主力品種「きたほなみ」の本病に対する抵抗性は”やや強”であるが、近年発生が目立つようになっており、抵抗性”弱”品種に準じた防除が必要である。本病による被害を抑えるためには、止葉抽出から穂ばらみ期に1回、開花始に1回（赤かび病との同時防除が可能）の薬剤散布が必要である。上位葉で発病が認められてからの防除では十分な効果が得られないため、発病が懸念されるほ場においては、前述の時期に防除を開始する。

(2) 秋まき小麦の土壤病害

令和元年度は道東地方で縞萎縮病の発生が目立った。また、道央や道東地域では立枯病によって早期に枯れ上がるほ場が散見された。これらはいずれも土壤中に存在する病原が原因となる。また、近年問題となっているなまぐさ黒穂病も土壤伝染することが明らかになっている。これらの土壤病害は連作により顕在化し、被害が深刻化する。

対策としては、土壤中の病原体を根絶することは難しいため、耕種的な対策を総合的に実施することになる。特に土壤病害に共通する基本的な対策として、連作や短期輪作を避けることが重要である。

(3) 野菜類のネギアザミウマ

ネギアザミウマはたまねぎ、ねぎなど野菜類の重要害虫であり、高温少雨条件で多発しやすい。令和元年度は5月に記録的な高温となり、本種が早発し、6～7月も高温少雨に経過したため、過去

に例を見ない多発生となった。また、本種はネギ類以外の野菜も食害し、キャベツでは8月に結球部被害が発生し、廃耕になったほ場もあった。

防除対策としては、防除開始適期を逸しないこと、効果の高い薬剤を適切な間隔で散布することが重要である。近年、5月が高温に経過することも多いため、防除開始適期が本年のように早まることを想定する必要がある。また、夏季の高温時期に栽培する作型では栽培期間を通して防除を実施する必要がある。

(4) りんごの黒星病

黒星病はりんごにおける重要病害であり、果実にも病斑を形成するため、発生すると商品価値を損なう。令和元年度は平成30年度に比べて被害面積率が低下したが、依然として発生面積率が高く、翌年の伝染源が多いと推測される。

防除対策としては、本病は発生量が増加してからの防除では防ぐことが難しいため、初期の防除時期を逸しないことが重要である。また、平成30年度には道内一部の地域で、基幹薬剤として用いられてきたQoI剤に対する耐性菌やDMI剤に対する感受性低下菌の出現が確認されており、防除薬剤の選択においては特に注意する必要がある。

(5) りんごの腐らん病

腐らん病は、りんごの最重要病害であり、胴枯れ、枝枯れ症状を引き起こす。冬期間を除くほぼ通年、病原菌の胞子が飛散・分散するため、りんごの栽培期間全体にわたって注意が必要である。

本病はこれまでも道内での発生量が多く、注意喚起を行ってきたところであるが、本年も多発した。そのため、令和2年度においても、伝染源が多いと予想される。

防除対策としては、薬剤のみで抑えることは困難なため、発病部位を物理的に取り除き、園外で処分することと、樹勢を維持して病気に罹りづらい樹を育てることが重要である。

4. 令和元年度に新たに発生を認めた病害虫

令和元年度に新たに発生を認めた病害虫は17(病害8、害虫9)である。一部を抜粋して紹介する。

(1) 小麦のミドリハダニ(新寄主)

症状は糸状菌による葉枯症状と似た斑紋が発生する。虫体はナミハダニに似るがやや小型で、体色は乳白色で暗緑色の斑紋を伴う。ほ場内の発生場所は周縁部に留まっていた。

(2) ゆきなのリゾクトニア病(新称・国内新発生)

冬期間無加温ハウス内で発生。収穫期に葉身が褐変腐敗、また葉柄が土壌と接する株元部分に腐敗が発生。病原菌は *Rhizoctonia solani* AG-2-1(培養型II)である。

(3) りんごのリンゴコスカシバ(国内新発生)

6月中旬から7月上旬にかけて、体長15mm程度で体色は乳白色、頭部や胸背は赤褐色を呈する幼虫が樹体を食害する。食害を受けた部位では、樹皮に樹液が漏出している様子が確認され、樹皮下に形成された空隙にはしばしば樹液が充満する。

(4) ぶどうのブドウサビダニ(新発生)

新梢の生育が遅延する。展葉した若葉は生育が遅く、下向きに巻き、葉脈に沿って褐変が認められる。成葉では葉全体に薄墨を塗ったような変色が認められる。ダニの体長は0.2mmにも満たず、紡錘形で淡橙黄色、葉表に多数の寄生が認められる。

特に注意を要する病害虫および新発生病害虫の詳細な情報については、[北海道病害虫防除所のホームページ](#)に掲載していますので、そちらもご覧ください。

